

武家年代記

作者: 不詳

成立: 花園天皇在位期(1308-1318)?



解題

Keyword

- 「鎌倉年代記」
- 「鎌倉大日記」
- 武家年表
- 柳原紀光
- 柳原家記録

『鎌倉年代記』(#2)『鎌倉大日記』(#3)などと並び称される武家年表のひとつ。治承4年(1180)から明応8年(1499)までの300年余りについて記述されている。朝廷と武家両方の動きを記している点で他の2書とともに有用である。

■ 成立経緯

作者は不詳。一般に時の天皇のことを「今上」(あるいは「当今」)と表すが、本書では花園天皇とその後の光厳・光明・後土御門の4天皇が「今上」と記されている。このことから、本書は花園天皇の在位期(1308-1318)にいったん編纂書として成立し、それ以後、適宜書き継がれたものと考えられる。

なお、長く唯一の伝本として伝わった宮内庁書陵部所蔵本は、その奥付から柳原家旧蔵とされ寛政9年(1797)に柳原紀光(やなぎわら・もとみつ)が書写したものであることがわかる。柳原紀光が書写する際には、版本『東鑑』(#1)によって、裏書に校合を加えたものと考えられ、宮内庁書陵部所蔵本にはその朱書きが見られるという。

■ 内容

『鎌倉年代記』『鎌倉大日記』同様、元は1巻で表・裏に記載された体裁であったと考えられる。寛永9年に柳原紀光が書写した際、これを上中下3巻に分け、表書を上中2巻に裏書を下1巻の形にしたようである。表書には歴代天皇、執柄(摂政、関白)・将軍・執権・政所執事・問注所執事・六波羅探題の各補任や経歴、裏書には各年の出来事、すなわち天皇・幕府・社寺等の関係記

事、政治的事件、天災等が記載される。また武家年表という性格を持つ本書には、幕府関係の重要記事が収められており、鎌倉幕府追加法を知る重要な史料となっている。

■ 柳原紀光について

本書唯一の伝本(宮内庁書陵部所蔵)を残した柳原紀光(1746-1800)は、江戸期の公家で『続史愚抄(ぞくしぐしょう)』を編纂したことで知られる。柳原家は代々紀伝道(きでんどう:歴史や文学を学び作文を習う課程)を世襲する家柄であったが、応仁の乱以後これが途絶えていた。これを嘆いた光綱(江戸中期)がこの回復のため国史編纂を計画し、その子紀光がその遺志を継いで『続史愚抄』を編纂した。この編纂の過程で書写収集された記録類は「柳原家記録」として宮内庁書陵部、西尾市立図書館岩瀬文庫にその大部分が所蔵されている。紀光の書写といわれる本書の伝本にも、柳原家蔵書印(「日野柳原秘府得朋記之印」)が見られる。「柳原家記録」は、すでに底本が散逸した資料が多く含まれ、書写も正確なものが多いことから、貴重な資料群とされている。

■ 諸本

前述のとおり、本書は柳原紀光書写の伝本が宮内庁書陵部に所蔵される。東京大学史料編纂所には、これの謄写本(1887年作成)がある。



史料本文を読む

<翻刻本>

- ◆*「武家年代記」(『続国史大系』第5巻 経済雑誌社 1903)
 - ※「附録」に収載 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で閲覧可能
- ◆「武家年代記裏書」(『続史料大成18』臨川書店 1967 [210.08/87/18])
 - ※底本:宮内庁書陵部所蔵本 図版、解題あり
- ◆「武家年代記」(『増補続史料大成』別巻 竹内理三編 臨川書店 1979 [K24/134])
 - ※上中2冊(表書部分)を合わせ元の年代記の体裁に書き直して掲載 図版あり